

Q

彼がメールを即レスしてくれません

彼とよく携帯メールのやり取りをするのですが、すぐメールが返ってきません。私のこと本当に好きなのでしょうか。こっちからはすぐ返信しているのに、絶対に許せません。

A

札幌学院大学人文学部教授

森 直久 (もり なおひさ)

まあ落ち着いて。ここは人生相談ではありませんので、メディア心理学という視点から答えてみることにします。ここでメディアとは、通信機器を指すこととします。新たなメディアの導入は、私たちの生活が再組織化される契機となります。ほとんどの人が携帯電話を持ち歩く時代において、応答がないことは、受信者に何か特別なことが起きているか、発信者に対するある種のメッセージであるかのように受け取られるでしょう。対面場面で声をかけても返事がない事態と似ていますが、対面とは違って、携帯電話では相手が見えませんが、応答がないことを危機的な状況の発生と懸念することもあるかもしれません。かつて母親は、子供の帰りを日が暮れるまで待っていました。今は学校、今は部活動、今は友達と遊んでいるというように、子供の現状はきっとこうであろうと思い描きながら、悠然と構えていたと思います。ところが携帯電話の導入によって、相手が応答できないかどうか、確認できるようになりました。そして応答がなされると、それが意味するメッセージを色々と想像してしまう。学校の行事で忙しいのか、いや親からの電話などうざいと思っているのでは、ひょっとすると何が事故にでもあったのではないかと、などなど。

メディアの導入は私たちの生活を再組織化「する」ではなく「契機となる」と先に言いました。メディアによって私たちが変わることもあるでしょうが、それは必然ではない。私たちの変わりようがメディアの特性に符合してしまい、活動が変化する方向もある。「すぐにメッセージに返信しないということは、それは、あ

る社会的な期待に反することを意味する。『即返』することは、ケータイを取り巻く1つの社会的期待」(伊藤・岡部, 2006)なのかもしれませんが、佐藤(1996)が言うように、メディアとわれわれのあり方の影響関係の実態は、双方向的ではないかと思えます。「いつでもどこでもつながり得る」という携帯電話の特性は、他人や世界に対する「信頼」を確認できる(すべき)ものに変える可能性をもっていた一方で、信頼が薄れたから、携帯電話で逐一確認をとろうとする、とれないと邪推するという事態に陥ってしまったのかもしれない。

あなたの場合ですが、彼が信頼のおける相手であるかを、確認してみたいはいかがでしょう。メールには文章を考え、推敲する時間が必要です。彼は、あなたが喜ぶような文章を書こうと努力しているのかもしれませんが。あなたのことを思って返信しようとするほど、タイムラグは大きくなるでしょうね。直近の仕事に集中しようとする、責任感あふれる人かもしれません。あなたのことは二の次だと思っている可能性もないとは言えませんが、あ、怒らないで、怒らないで。今年は「絶対に許せない」ではなく、ひとまずスマイルでいきませんか。

文 献

伊藤瑞子・岡部大介(2006)「テクノソーシャルな状況」松田美佐・岡部大介・伊藤瑞子(編)『ケータイのある風景』北大路書房 pp.221-237.

佐藤俊樹(1996)『ノイマンの夢・近代の欲望』講談社



Profile — 森 直久

札幌学院大学人文学部教授。専門は認知心理学、社会心理学。主な著書は、『心理学者、裁判と出会う：供述心理学のフィールド』(共著、北大路書房)など。